

台北蘋果紀行



「私は嘘吐きである、それも正直な嘘吐きである。」フェデリコ・フェリーニのこの言葉が好きだ。そして、私も嘘吐きである。友達から講釈師と言われるくらいだから多分本物だろう。でも本人はそれ程自覚していない。

私が思うに全てのノンフィクションはフィクションである。そういう意味でこの台北蘋果紀行 (Taipei Apple Tour) は嘘八百を並べたものと言って差し支えない。よって文中に登場する人物は実在するものではありません。CIAもKGBもそこを誤解しないように。(iGa-chang)

羽田発中華航空 CI-101 便

その日、羽田国際線ターミナルは東亜細亜の辺境であった。美国大統領請求書乗金団一行が野蛮国大統領慢性酒精中毒江里都淫に会いに、道中、美国乃属国首相覇支流を伴い出立するため羽田国際線ターミナルビル周辺は旅行者より官憲の数夥しく戒厳令の様である。

集合時間に一番早く現れるものは一番遠い所から来る者という定め通り、ターミナルビル入口前で官憲の手荷物チェックを受け中に入ると、ここは東京か台北か東亜細亜の辺境のローカル空港の趣の中に古山くんが一人所在なげに入口正面のベンチに座っていた。羽田から台北へは平日は一日三便あり、我々の乗る便は17:20発の最終便中華航空 CI-101、ターミナルビルにいる乗客もその最終便で台北に帰る人が殆どである。古山くんが煙草を吸いに喫煙コーナーに行き、戻ってくるなり「あそこは台湾やくざがたむろしているぜ。いまだきソウルのやくざもしてない珍しいファンクションセンスだ。」と報告する。東京デイズニールンドの御土産袋を抱えた台北の女子大生風のお嬢さんや、Made in JAPAN と大きく書かれた電気炊飯器の段ボール箱を抱えたオバサンと日本土産も世代格差があって面白い。家電メーカーが台湾、マレーシア、シンガポールと生産拠点を海外に移し日本の産業構造が空洞化するなか東南亜細亜からくる旅行者の求めるものが Made in JAPAN の家電製品というのも複雑である。

30分ほどすると、O-san がインディゴ・ブルーのコットン・スウェーターにジーンズの軽装でやってきた。同行する編集のT氏はまだ現れない、やはり遠い順に集まり、一番近いものが遅刻する。T氏が来る前に先に搭乗手続きを済ませボーディングパスを受け取る。一時間程の遅刻でJunJun氏、T2氏がやっと到着する、山手線内側に居るものはこれだ。元々、JunJun氏がO-

sanに台湾と一緒に行かないかと誘われてるとい話しを耳にしていた。JunJun氏が編集する雑誌にMacWorld Expo Tokyo のレポートを書く予定でのところ、台北でも MacWorld をやるらしいから、TokyoとTaipeiをまとめて記事にしまおうと云うことで今回の台湾行きを計画した。で、古山くんも幕張は面白くないけど台北なら面白そうだし行こうかと云うことになり、台北といえはO-sanに黙って行くなんで恐れ多く、お伺いの電話すると「面白そうじゃん」とあいなった。

O-san は昔、仕事で台北に長期滞在していたことがあり、初めは台北の飲み屋でお姉ちゃんに片言の中国語を教わり、ばか話をしていたが、やっぱり基本が出来てないと会話にならない。それで一念発起して先生について基本から北京語を憶える気になったという。5人の中で、日常会話に困らない北京語を話せるのはO-sanだけである。JunJun氏は取材で何度か台湾を訪れているので、初体験組は僕と古山くん編集のT2氏の三人。出国検査を済ませると他の四人は皆免税の煙草を買いに行く、煙草を吸わない僕が荷物の番をすることになる。美国大統領に同行取材するらしい報道の人間が今ごろ出国検査をしている、きっと遅れてきたのだろう。

2階の搭乗ロビーに移動する階段から表が見える。機体に星条旗を付けたジャンボが駐機している。ん～何だか悪い予感がしてきた。2階の搭乗ロビー手前通路から見ると、ジャンボが二機ともう一機が駐機している。ターミナルビル屋上にはトランシーバーを携えた官憲が見張っている。あちらこちらに官憲が立っている。リムジンの大名行列がジャンボ機から離れてゆくのを見届けて中華航空CI-101に乗り込む。予感的中し大統領専用機を先に発せせる為、17時20分発のCI 101便が羽田を発ったのは50分遅れの18時10分であった。

台北蘋果紀行

台北中正国際機場

中華航空の機上の人となった我々をもてなしてくれる優しいお姉さま方、誰一人として日本語で話しかける者なく、北京語で食事は牛か鶏かどちらが良いか聞いてくる。やっぱり通路側に古山くんが居ると無理もない。彼は羽田国際線ターミナルに着いたときから台湾人に同化しているのだ。そのうち優しいお姉さまも気を利かしてか残ったワインを古山くんのところまで持ってくるようになった。後で後方の席にいたJunJun氏に訪ねたところ「いやあー、ちゃんと日本人には日本語で対応してくれたよ。」我々は日本人には見えなかったらしい。

台北中正国際機場に到着したのは日本時間午後9時半、現地時間で午後八時半である。到着ロビーに降り、入国検査までの通路に「麻薬所持即死刑」の大きな看板が目立つ、入国検査で無愛想でごっつい女性係官にじろりと睨まれる、おー怖。全員無事入国、空港でとりあえず両替をする。10,000円が2,437圓のレートだから約4倍すると日本円になる勘定。

ターミナルビルから表に出るとごわーと湿気と熱気が身を包み眼鏡が曇る。亜熱帯の島に下り立った事を肌身で感じる。空港から台北市内までは高速道路をバスでアバウト30～40分くらいかかる。終点の台北火車站で降りるが右も左も解らぬお上りさん状態、お上りさん相手に客引きするタクシー運ちゃんの間を潜り抜け、歩道橋を渡り反対車線で流しのタクシーを拾うことにする。ここでO-sanとJunJun氏にはくれたら今日泊まるホテルに行き付けないから、必死でO-sanの後を追ってタクシーに乗り込む。

台湾や台北の予備知識も何もない白紙状態である。どうせガイドブックを読んで情報を仕入れても体験しなければ知識にならない、空間を体験しなければ脳内にイメージマップを描くことも出来ない。と、私の場合は旅行から帰ってから、その土地を調べることが多い、その方が既に体験があるからすんなり理解できると、これは物臭者の言い訳。

タクシーは台北のメインストリート中山北路を北に上り五つ星ならぬ五つ梅ホテル國賓大飯店の角を右折して150m程行ったところで止まる。着いたところは我々の泊まるホテルの裏口、ダウンタウンの裏通りはブレードランナーの世界である。

裏庭を通り扉を開けるとホテルの裏口はバーになっている。カウンターにいるママがO-sanを見て懐かしそうに声をかける。ここはO-sanの台北の定宿、緑峯大飯店ことHotel Green Peakなのだ。バーを抜けてフロントでチェックインする。僕の部屋は415、古山くんとT2氏は共に4階の部屋、O-sanとJunJun氏が7階の部屋、エレベーターに7階のボタンはなく6階までしか



すっかり台湾に同化してしまった古山くん

い。7階はペントハウスで6階から階段を使わねば行けないが、落ち着いて静かで良いと常連O-sanの弁。4階でエレベーターを降りフロアマネージャーのオバちゃんに鍵を見せ部屋に案内してもらおう。荷物を片付け一息いれてから、街へ出掛けようとエレベーターを持っていると、さっきのフロアマネージャーのオバちゃんが片言の日本語で話しかけてくる。「アンタ、カノジョイナイカ」古山くんが、何言ってるだろうと「??」オバちゃんの言わんとすることを察した僕は笑いながら手を振ってエレベーターに乗り込む。オバちゃんのサイドビジネスは言わば周旋屋である。JunJun氏の話しでは昔は夜寝ているとセールスレディの訪問を受けることがあったそうで、セールスレディと言っても日本生命のCFにも出てくる脱いでも凄いい北浦供笑ちゃんの役どころではありません。

一同揃ったところで、O-sanの案内で巷に繰り出す。裏道を歩き、路地を抜け暫くすると、変な親爺が話しかけてくる。家具屋の親爺だというその男「オンナノコ、ショウカイスルヨ、イイコイルヨ。」としつこい、表通りに出てもまだ付いてくる。表通りに面した建物は一階部分が二間程セットバックしてイタリアの都市に見られるロジリアと言いたいところだが、アーケードと呼ぶのが適当な表現、もう10時近い時間なのに店舗は皆開いて商売してるから街は明るい。飲食店は店先に魚介類、肉等の食材を並べ、客の選んだ食材を店頭で調理して中のテーブルまで運ぶシステム、屋台が数軒集まった屋台村もあるが、何れも食材を店頭でディスプレイしている。さっきの親爺、林森北路の映画館の辺りまで付いてきて「イツデモ、イイカラネ、ヨ

台北蘋果紀行

ロシクネ」と諦めて帰っていった。見物がてら南京東路を越えた南側のクラブやバーのある飲食街まで歩いていったけど、やっぱり屋台で小腹を満たそうということになり、今度は中山北路をぶらぶらと戻ることにする。

台北の街路はグローバル座標に基づいて構成されている。Y軸座標が南北軸に走る中山北路及び南路である。Y軸座標の座標原点から+方向が中山北路、-方向が中山南路となっている。一方のX軸座標の座標原点から+方向が忠孝東路、-方向が忠孝西路である。そして、東西南北に向かって一段、二段と町名が付けられている。という原則に気づいたのは日本に帰ってからのことである。何しろ、戒厳令が解除されてからまだ10年と経っていない国である。地図にしても政府の許可がないと発行できない。当然「びあmap」なんてものはない。ホテルで買った特色印刷の台北市街地図も縮尺が定かでないなど、地図が軍事秘密だったころの名残だろうか、漢字だけの地図を読み取れるようになるまで暫くの時間が必要。

O-san が近くで何処か美味しい屋台がないか聞いてくると言って、緑峯大飯店隣のカラオケ・パブに入ってゆく。暫くしてO-sanとお姉さんが店から出てきてこの辺りにある屋台は美味くな

いから、この店にしなさいと同じ通り(こちらでは巷と書く、なんて読むか解らない)の東側数軒先の店に我々を案内する。間口二間くらいの店先に瓦斯コンロを設け、奥に4~5つのテーブルが無造作に置かれた店で、客は我々の他に若い一組のカップルだけである。何にするか、店先の冷蔵庫を覗いて決めると言う。食材を見て適当にコレだアレだと言ってみても、実際にどんなものが出てくるのか判らない。ま、取り敢えずビールで乾杯、歩き回ったせいかビールが美味しい。こうした旅行のときでも出される料理は大体食べられるから、好き嫌いが少ないのは幸せ。モロミと魚介類の炒めものをよくみればモロミは隠れた浜松名産の浜納豆ではないかと、古山くんは台湾で浜納豆のルーツと予期せぬ遭遇をして感激、大陸より伝播した大豆醗酵食品文化は台湾ではモロミのまま調味料に、浜松ではそれを乾燥させ浜納豆に、信州では味噌に、野田や銚子では醤油に姿を変えた。東亜細亜の醗酵食品文化は味の素以前にアミノ酸を調味料とすることに気付いていた。シマアジがマナガツオのような魚の唐揚げも中々美味、最後は担仔麵で締め括り、満腹。腹が脹れたところで、そのままO-san 御馴染みのお姉さんのカラオケ・パブに御一行様御案内い~。古山くん御持参のブルースハーブの独演に始まった酒宴はそのまま夜中の二時まで続いたのであった。



台北蘋果紀行

中華民國八十五年四月十九日

目が覚めると時計が9時を指している。いけない、確か朝9時集合だった。寝坊したと飛び起きる。まてよ、この時計は日本時間のままで、するとマイナス一時間でまだ8時か、まだゆっくりしてられる。タペはそのまま、ボタンキューで寝てしまったから、朝風呂、朝シャンしてさっぱりしてから出掛けよう。

9時に下に降りるとまだ誰も起きてこない。パーでコーヒーを飲みながらゆっくり待つ。全員集合したのが結局10時、明日の集合は10時にしようね、と満場一致、朝粥で腹ごしらえしていざ出陣。民生東路まで歩いて、タクシーを拾い台北世界貿易中心(ワールド・トレード・センター)までタクシーで行く。台北の旧市街は忠孝西路の南側、淡水河に面した地域から都市が生成され次第に北に広がり、それから東側に広がる。グローバル座標の原点を中心に時計回りに都市が発展してきた。台北世界貿易中心はその台北の新市街地の東に位置し、同じブロックの隣に凱悦大飯店(グランド・ハイアット・タイペイ)がある。

麥金塔国際電腦展 '96 台湾

AdobeがAppleとMacintoshにとって最も重要なソフトウェア・メーカーであることはここMacWorld Expo Taiwan'96に於いても証明されることになった。硬體(ハードウェア)、軟體(ソフトウェア)、卓上出版興印前作業(DTP)、多媒體(マルチメディア)、網際網路(インターネット)等、展示内容はさほど日本と差があるわけではない。出展企業はコダック、ゼロックス、ライノタイプ・ヘル、エプソン、富士通の外国企業と台湾初のMacOS互換機メーカーUMAXの他は全て中小メーカー、代理店

である。東亜細亜に於けるMacWorld Expoはシンガポール、東京、香港に次ぐもので、今や世界一の規模となったMacWorld Expo Tokyoに比較すると幕張メッセの展示ホール一区画よりも二回りほど小さい会場は、台北のどこにでもある屋台村の賑わいを示し、大手メーカーのブースとイベント・コンパニオンのお姉さんばかり目立つMacWorld Expo Tokyoとは一味違う雰囲気である。中でも美商蘋果電腦台湾分公司エリアは中小代理店の屋台のようなブースが並び、その間に並べられたテーブルではビジネスマンや起業家達が熱心になにやら商談に花を咲かせている様子、通路ではくわえ煙草の男が札束を数え取引成立、これも中華式プラグマティズムか、人が集まればそこがマーケットになる。ここにも圓環(ロータリー)を不法占拠して屋台村にしてしまう台湾人のバイタリティを感じる。



中文版的MiniCAD6.0のデモ、代理店はform・Zも扱っている。



台北蘋果紀行

キーボードを出展しているメーカーが二つあり、どちらも日本のアルプス電機から技術ライセンスを受けていた。キーボードをゾーニングで色分けし、トラックボールの付いた超可愛いキーボードがあったので、売ってくれと言ったけど、それはExpo用の見本で売れないと断られた。O-sanは念願の中文版キーボードをExpo特価の日本円で5000円余りで買い求め、目的を達し御満悦であった。古山くんはT-シャツとAppleグッズの腕時計を買い、後でO-sanも娘にと同じ腕時計を買った。

UMAXのMacOS相容電脳(互換機)はPowerPC604/150Mhzを採用したUMAX Pulsar 1500とPowerPC604/120Mhzを採用したUMAX Dino 1200の二種を展示していた。Pulsar 1500はスペック的にPowerMacintosh9500/150に該当するものであるが、マザーボードの設計から全てUMAX独自の設計となっている。CPUスロットと並んでPDSスロットがあり、ここにセカンドCPUカードを増設することによってマルチプロセッサ対応となる。何れもCPUのアップグレードはカードの差し替えで簡単に行える、但しお金があれば話し。PowerMacのモニター型がメモリー増設等の内部拡張に際し、一部ボード類を外さなければ出来ないのに対して、Pulsar 1500は筐体カバーを外すだけでそれらの作業ができるなど、当然といえば当然な工夫がされている。但し、出展されているPulsar 1500の筐体は金型が最終的なものでないせいか精度的強度的にもに問題のあるものであった。UMAXはExpoの一月後の東京ビジネスショーでもUMAX Pulsar 1500を出展した。既に日本市場の開拓に備えて漢字Talkのライセンスも取得している。日本市場への出荷は7月後半くらいから、価格は50万以下を設定とのこと、UMAXの担当者曰く「うちの方がAppleより技術力は確かですから信頼できる製品を出荷できます。」「だってさ、亜米里欧(アメリオ)おざさん聞いたかい。

Appleは東亜細亜に留まらず汎太平洋の情報流通のハブとして重要性を増しているシンガポールにR&Dの一部を分散し、中文の音声入力システム「Chinese Dictation Kit」をはじめ2バイト

コード圏のOS開発や、文字認識システム等ソフトウェア開発だけでなく、一体型Macintosh等のハードウェア開発も行っている。MacWorld Expo Tokyoに「Chinese Dictation Kit」のデモンストラーションの為に来日したシンガポールR&Dの青年は少年と呼ぶのが相応しいまだ18歳の若者であったことから、何れインド、シンガポール、中国、台湾、韓国と亜細亜の俊英達がAppleの危機を救うことになるのかも知れない。さて、そこにAppleJapanの人間も含まれるかは、余り期待しないほうが良さそうだ。

UMAX Pulsar 1500 Mac™ OS 相容電脳



中文版MacOSのSystem7.5.3は既に雑誌MacWorld-Taiwanでそのローカライズが発表されているが、日本国内ではその時期も未定と漢字Talkが2バイトコード圏のOSをリードしていた時代は終わり、東亜細亜にその中心が移動している。WorldScript技術によってマルチリンガル・コンピュータとしてのアドバンテージをもつMacintoshにとって多言語が存在する東亜細亜はDTP分野でより市場的優位に立つ。Expoの最終日、台北の中正記念公園の芸文広場で著作権への理解を広めるイベントが行なわれ、出版界、音楽界共に海賊版の追放キャンペーン

を通し過去のアンフェアなイメージの払拭を図っていた。後日談であるが、帰国してから出版社に打ち合わせに行ったおり台湾での出版界の話が話題に上り、そこでも中文版への翻訳のオファーが台湾の出版社から来ているが、その台湾の出版社から以前、海賊版を出されたことがあり、それを自著として上梓した台湾の大学の先生と著作権問題が解決しないうちは見送るざるを得ないと話していた。結局、中正記念公園での著作権キャンペーンも社会に知的所有権の意識が浸透していない事の証しでもある。

数少ない外国企業のライノタイプ・ヘルがMacWorld Expoに出展していたことから、何れ台湾もデジタル・パブリッシングが主流となり国際的な出版流通に於いても頭角を表わす時期がおとずれるだろう。但しそれは李登輝の言う民主化が徹底された後の話しである。

台北蘋果紀行



緑峯大飯店 (Hotel Green Peak) 前の通り、車は一方通行で手前から向こう(中山北路) にしか行けない。左の植え込みが緑峯大飯店のエントランス前になる。

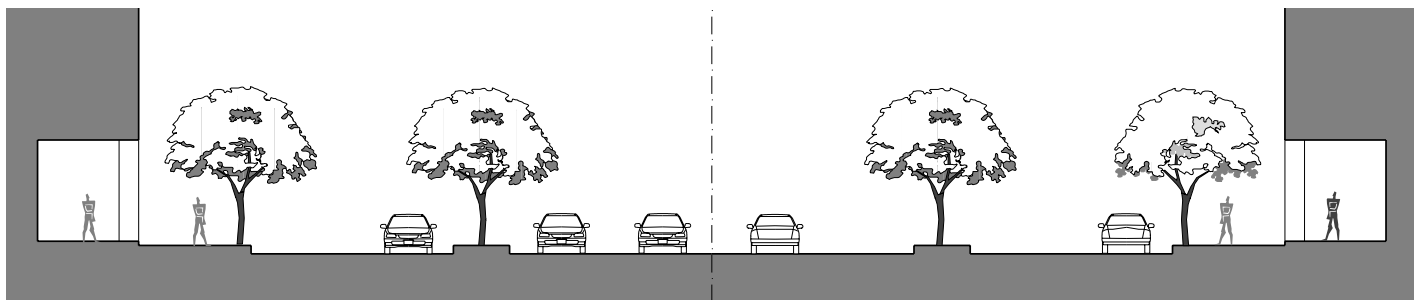
一人部屋で一泊 1100 圓、三泊で 3300 圓だから日本円に換算すると 4 倍して三泊 13,200 円しかなかった。建物は古いけれど部屋も改装してあるので綺麗、バスタブも日本のビジネスホテルよりは広い。但し表に面した窓はなく、ライトウェル(光の井戸) に面してサッシュを嵌め込み窓らしくしている。

台北世界貿易中心の 2 階にあるカフェテリアで昼食をとってから表に出ると外は雨、傘がない。亜熱帯特有の雨が多い国に造られたカルフォルニア風の建物はロシアも何もない、おまけに広場のペーブメントに水勾配や排水等の配慮は全然考えてない。だけど、外は雨、傘がない。

比較的雨の掛からないところに身を寄せて 20m くらい離れた通りのタクシーを止め、一目散に駆けだしタクシーに飛び乗る。台湾の運ちゃんは目が良い、日本だったら絶対とまらない。助手席に座り、運転席を見るとそこはワンダーランドだった。タコメーターの前にはピンクの目覚し時計、スピードメータは悪魔の誘惑、これは寺院の厄除けのお札を貼って封印、機械を信じるより身体感覚と神仏の御加護を優先。ルームミラーからは幾つものお守りがぶら下がり、運転手の首には水晶の厄除けネックレス、左腕に紫檀で作ったブレスレットか数珠、運転席で中国五千年の歴史と西洋文明がせめぎあっている。

台湾で車を運転するのは車間距離 10cm、車幅感覚 5cm、この身体感覚に動体視力、そして何よりも自然に車の流れに合わせるスピード感覚がなければステアリングを握るのは止したほうが良い。

ホテルに戻り、O-san は台北の友人へ会いに、JunJun 氏、T2 氏は昨日のカラオケ・パブのお姉さん群群に散髪屋に案内してもらおうということで、また夕方の集合時間だけ決めて夫々自由行動、僕と古山くんは本屋を探しに街に出る。ホテルから出てアーケードを通り途中にあった昔ながらの「よるずや」に入り、一本 120 圓の傘を買う。カップ麺や缶詰、瓶詰等の食品や水商売御用足しグッズ等も取り揃えてある。銀座の裏通りにも似たような水商売御用足しの店があるから、東亜細亜共通なのかも知れない。中山北路と南京西路の交差点角に本屋があると教えられた通りに行くと、角の建物の 1 階はパルコになっていて、上の階にも本屋らしきものはない。ぐるりと中山北路にそって歩くと南側隣の建物に「Q-永漢書局」の看板発見、書局は四階、エレベータで上に昇る。フロアの右手は日本の雑誌と書籍、左が中文の雑誌と書籍とに分かれている。エレベーター前のコーナーには台湾関係の書籍と Q-永漢の著書がずらり、名前通りこの書局は Q-永漢の経営らしい。それで、日本の本も取り揃えてある。尤も、こうして日本の本が並ぶようになったのも 1988 年の李登輝体制になってからのこと、それまで日本の雑誌書籍は御禁制品で空港でボッシュアウト、持ち込み禁止であった。

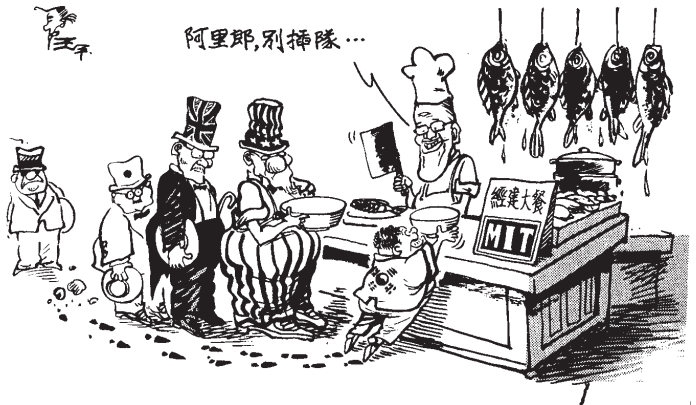


中山北路の横断面、主要道路は片側 4 車線が一般的、本線と側道に分けその間に緑地帯、建物は 1 階部分を後退しアーケードにして夏の日除け

台北蘋果紀行

台湾のマルチメディア関係の雑誌を見ると、我々とは違う色彩感覚に驚かされる。スクリーンショットの枠線をワインレッドにするなんて日本人にはとてもできない。他に、単行本等の書籍類の殆どがペーパーバックの紙表紙特色印刷でハードカバーやビニールコーティングされたブックカバーの付いたものはなく、何となく質素な印象である。彩色にPhotoShopも使っているらしい劇画「水滸」と政経八百という政治風刺漫画の本を買う。CDを買って帰りたいので、書店の店員に近くにレコード屋がないか尋ねても知らないと要領を得ない返事。一旦、ホテルに連絡の為帰らなければならないので、古山くん一人だけ台北駅の方にレコード屋を探しに行き、僕は一人でホテルに戻る。ホテルに戻るとJunJun氏とT2氏はこれからやっとな髪屋に出掛けるところ、晩飯の時間を決めて部屋に戻り買ってきた本を置いて、またレコード屋を探しに行こうとロビーに戻ると、傘を誰かに持ってゆかれてしまった。代わりの傘も何も無い。また120圓払うのは嫌なので、部屋に戻って夜に備えて一眠りする。Z..zzzzz....gaga....pu!

プロダクションシステムで制作。一部、Mac? +Photoshop 使用



漫画は世相を写す鏡のようなもの。 政経八百 王順坪 / 著作

顔を洗ってロビーに戻ると、古山くんが台湾歌謡のCDを買って戻っていた。まだ、JunJun氏とT2氏は散髪から戻っていない。古山くんは浜松やに行かないといけないからと一人で先に出る。浜松やは古山くんのカミサンの同級生の旦那が台北で開いている店である。台北にくる前から、古山くんのところに電話する度にカミサンから台北に行ったら浜松やがどーたらこーたらだから行ってくださいと、二度三度言われていた。浜松やという屋号から想像できるとおり、浜松やは鰻やである。浜松の養鰻業者が台湾の養殖鰻にその地位を脅かされ、生き残りの為、台湾から養殖鰻を輸入するようになって、仕舞いに台湾で日本人相手に店をだすようになったそうだ。古山くんのカミサンに聞いた話だからこれ以上詳しくない。

そうこうするうち、JunJun氏とT2氏が群群と一緒に戻ってきた。髪を切ったJunJun氏とT2氏はヘアスタイルが台北に同化していた。僕の傘を黙って持っていたのはJunJun氏であった。よろずやマーケットの正札をそのままにしてあったので直にわかるのだ。JunJun氏はまたインタビュー取材に出掛けるということで、残ったT2氏と群群と三人で晩飯に行こうと云うことになった。どこに行くか迷った揚げ句、じゃ古山くんもいるから浜松やに行くかと云うことになった。浜松やはホテルからそう遠くないDFSの近くにある。

店に入ると、カウンターの隅に古山くんと主人がいた。それではということで典型的な静岡県人(他県の者から見れば直に判るが言葉で言うは困難)の主人が座敷の方に我々四人を案内する。お造りと小鉢を幾つか、蒲焼きを頼み、最後に鰻茶漬けで仕上げる。蒲焼きもふっくらと仕上がりにして味は良いが、タレがこなれていない感じ、タレは日本から持ってきたというが気候風土の影響もあるのか。しかし、いかんせん料理がでるまでが長いこと待たされる。調理場を見ても芸術家肌の花板の他に大勢いるが、いるだけで機能してない。やっぱり言葉の障壁は大きい。主人自ら北京語をマスターする気構えでないと、と口で言うは易く行方は難しである。



台北蘋果紀行

群群（チュンチュン）は台湾の高地民族、阿美族の出身である。古山くんは彼女を森の妖精と呼んでいた。一方、群群は古山くんをおじいちゃんと呼んでいた。どうしてか知りません。阿美族は日本の植民地時代は高砂族と呼ばれていた台湾の少数民族の一つである。やはり本省人や外省人とは違うエキゾチックな彫りの深い顔立ちをしている。どちらかといえば琉球王国の沖縄の人に近い。彼女の戸籍上の本名は千代子と言うが、戦前の生まれではない。戦後も国民党の支配下になり大分経ってから生まれている。彼女は学校を卒業し台北に出てきてから日本式の名前では差別もあるので普段は中国式にしているようだ。

そういうところは日本憎しと漢字まで捨てた韓国と事情が異なる。日本と韓国朝鮮のように異母兄弟の関係は、一度拗れると、どこまでいっても互いに意趣返しの日チゴッコとなる。これを解決するには国の成り立ちに立ち戻るしかない。歴史学者が奥歯に物の挟まった言い訳しても問題解決には程遠い。レブリカントのネクサス6号でも自分がどこから来てどこへ行くのかアイデンティティを求めて地球に戻る。神話にアイデンティティを求めたのが明治政府や帝国主義者であるが、戦後51年経つのに未だ歴史の検証を棚上げしたまま、自己批判すらできない日本はどこへ行くと言うのだろう。

高級クラブにて

10時にO-sanから連絡があることになっているので、ホテルに戻り部屋でベットに転がって待っていると。電話のベルが鳴り「いまから10分後に、ジャガー、えーとベントレー、ダイムラー、まあいいや車がホテルの前まで迎えに行くからそれに乗って拉致されてきなさい。」とO-sanから電話。ホテルの前で待っているとやがて12気筒エンジンの音と供に車が迎えにきた。車はそのまま我々を乗せ夜の台北へ滑りだす、東に向かっているらしいことだけは解る。やがて南国風の並木道を通り抜けロータリーを通過してから、鋭角に左折し暫くして右折して車が止まった。運転手に案内され階段を昇り、いわゆる一つの高級クラブに連れていかれた。店内に入り、右手のガラス張りの応接室風な部屋に通されると、O-sanと我々を招待してくれた社長の洪さんがにこやか我々一同を迎えてくれた。

社長さんはO-sanの友達がマネージャーをしてる建設会社のオーナーである。O-sanの友達で東大に留学していたことのある人が台湾に帰って近代的なマネージメント・システムを導入した建設会社を起こしたいと思い立ったとき資金を提供してくれたベンチャーキャピタル、いわば台湾のロス・ペロー氏のような人である。そうして社長さんは若い起業家に出資し幾つもの会社のオーナーをしている。



左：配達車両はサファリ仕様のバンパーでガードしてる、これさえあれば狭いところに駐車しても大丈夫。

上：台北の犬は放し飼いにされている。だからどこでも好きところで惰眠をむさぼる。でも、ストレスもないから吠えたりもしない。

右：南京西路から承德路を台北駅に向かって見る。

台北蘋果紀行

社長さんがどこの出身か知らないが、孫文も現在の総統で内省人の李登輝も元を正せば客家の出身である。そして、現代に於いて客家はワールドワイドな金融ネットワークを持っている。彼らは人間的な関係を重視し、信頼に足りると見込んだら、その人間に投資する。こうした社会では他人の金を好き勝手に使う住専のようなことは起こりえない。

酒逢知己千杯少 話不投機半句多
借酒澆愁愁更愁 抽刀斷水水更流

社長さんは隣に韓国美人のお嬢さんをはべらし、バーボンに酔いつつ、酒に借りて愁いを紛らわしても更に愁いが増すだけ、知己を大切にせいと、中国五千年の仁を説いた。

ホールでバンドの演奏が始まると、席をホールに移動し、社長さんは生のジャズバンドをバックに自慢の喉を御披露してくれた。代わって、古山くんが「カスバの女」を唄う。僕はこの唄をリアルタイムで知らない。こういう古い唄は古山くんの専売特許であるから群群にオジイチャンと言われるのだろう。台湾の若い社長さん達の唄はどことなく、米国留学生生活を懐かしむようでもあり、上海バンスキングの世界というよりも駐留米軍の将校倶楽部という雰囲気だった。

帰りは、社長さん自らの運転でホテルまで送っていただき、そのままホテルに戻らず、また隣のカラオケ・パブで一日の最後を締め括ることにあいた。

中華民國八十五年四月二十日

この日は昨日より一時間遅らせ10時に集合、バーで珈琲を飲んでいると古山くんが現れ朝粥を頼んだ。「今朝は國賓大飯店で飲茶にしよう。」という夕べの話しを彼はすっかり忘れていた。断る間もなく、古山くんの前に膳が並べられ、仕方なく彼は残さず食べた。そう、旅行中はいつでも最後の晩餐になるかも知れないのだ。全員集合したところで國賓大飯店に行く、歩いて二三分の距離だ。國賓大飯店はアンバサダーホテルともいう、梅五つの台北でも最高クラスのホテルで日本円で一泊2万円だから東京と大差ない。2階のレストランが飲茶になっている。テーブルについて、ワゴンから適当に蒸籠を選び、点心の他に粥も頼む。点心類はそれなりの味で可も不可もないが、粥は美味かった。既に、朝粥を食べた筈の古山くんも皆と同じようにしっかりと箸を運んでいた。昨夜の話しで、O-sanと古山くんは晩の飛行機で台湾の東海岸、花蓮に行くことに急遽決まった。我々は月曜から仕事なので花蓮行きは諦めることにした。僕とT2氏は故宮博物院へ、古山くんは下町探索、JunJun氏とO-sanは夫々、仕事でそれぞれ別行動となった。



台北蘋果紀行

御宝拝見

取り立てて御宝に興味あるわけでもなく、この手の陳列品にしても国内で開かれた巡回展で似たような物を見たことがあるが、NHKで特別番組を放送していることもあるし、せっかくここまで来たことだからと云うことで、T2氏と二人、國賓大飯店の前からタクシーに乗り国立故宮博物院に向かった。山の懷に建てられた国立故宮博物院は建築的に見るべきところが一つもない急場凌ぎの安普請である。台湾に逃げてきた蒋介石と国民党が大陸から持ち出した故宮博物院の収蔵品を取り敢えず展示して、吾こそが中国五千年の歴史の正当な後継者であることを民に知らしめる為、威厳ある様式美の博物館を造ることが急務だったのだろう。それは解るが、しかしハリウッドの映画セットの方がまだしもましな気がしてならない。

何故だろうか、博物館とか美術館にくるとゆっくり時間をかけて見るができない。いつもせわしなくそそくさと一巡して出てくる。たぶん、ガラスケースの向こう側にあるものを見ても、結局只の情報で、インターネットで見るモニターと同じ気がしてならない。ただ、こうした博物館にくるメリットはボタンをクリックする必要もないし、ページをめくる必要もないということくらいかも知れない。

すると、焼き物の釉薬の色がどーたらこーたらと本物でなければ解らないという反論も当然あろうが、自分で手に取ることが出来ないものをあれこれ言っても仕方ない。

館内を歩き回り疲れたのでペントハウスの喫茶室でお茶を飲むことにした。蓋付きの茶碗とお湯の入った急須が運ばれた。お茶の葉は茶碗一杯に入れられ、お湯を入れ蓋をして蒸し香りを膨らませ、茶碗の蓋をずらしてそのまま飲む。馴れないと何だかもどかしい。

お茶を飲んで休んでから、展示室に戻ると先程より入館者が増えている。団体ツアー客が昼食を終えてどっとやって来た感じだ。団体ツアー客に混じって見学コースを回っていると、案内人の説明が、あちらから朝鮮語、向こうは日本語、こっちは英語、それに混じって台北の高校生の一団が校外授業、当然ここは北京語。

一通り一巡して表に出ると雨が上がっていた。やっぱり観光バスが何台も駐車している。帰りはバスにしようと歩きだすと、また変な親爺がついてくる。今度はほん引きではない。自称タクシー運転手である。「オニイサン タイペイカエル ヤスクスルヨ ノツキナサイ 100エン イイヨ、ホント120エンスルヨ」「シャシン トルノ ココテマッテルカラ」断ってもしつこく、「ソッチ イッテモ タクシ ツカマラナイ」バスで帰るからいいと断って、階段を降りるとようやく諦めた。

階段の下にいるタクシーの運ちゃんはそれ程しつこくない。「バスにのるから」というと「あっそう」という感じ。

バス停で暫く待つと、折り返しのバスがやってきた、行き先が台北駅になってないので多少不安だったが、何とかなるだろうと乗り込む。運転手は無愛想が制服を着たような人間で運賃を確かめようにも言葉は通じない。料金表を探して12圓と書いてあったのでポケットから12圓を出し、運転手に見せると、大きく首肯き料金箱を指差す。

運転が荒いのはタクシーの運ちゃんだけかと思ったら、バスの運ちゃんもそれに負けじと飛ばす。重慶北路にでて道が渋滞してなければバス同士でも譲ることなく張合って飛ばしている。



台北蘋果紀行

バスでは時間が掛かると思いしや、暴走バスはあっというまに圓環まで来てしまった。停留所を一つ行き過ぎたところでバスを降り圓環を見に行く。圓環は交差点のロータリーである。東京でも昭和30年代まではロータリーがあった。明治通りと尾竹橋通りの交差点にあった宮地のロータリーは子供の頃、足立区梅田から浅草行きバスに乗り鶯谷に出て山ノ手線に乗るとき、よく通った。ロータリーに沿ってメリーゴーランドのようにバスや自動車が回って行くのが子供心によく見えた。

本来は緑地帯として整備される筈だった圓環に不法占拠のバラックがぐるりと建ち並び屋台村となっている。既に、バラックの撤去は決まって、営業している屋台は全体の1/3~1/4くらいだろうか、放射状の通路にはエロ映画や実演のポスターが貼ってあり、上野、浅草界隈を思わせる。圓環の中心はロンドンダ状の小広場となって、何か客家の集落のようでもある。内省人と呼ばれる革命以前に大陸から移り住んだ中国人には福建、広東から移住した客家人が含まれ人口の約15%を占めると云われる。バラックの屋根は何重にもナマコ板が葺かれ、朽ちてゆくものは為すがままにしてる。

圓環から南京西路を東に中山北路に向かう途中に国防意識昂揚のポスターと思しきSafe Sexを訴える行政院衛生署の看板、意図するところは明快であるが、従軍慰安婦問題が解決しない今日、日本人にはちょっと複雑でもある。

バス停の前にあるパン屋に女子高生がたむろしている。パン屋のショーウィンドウを覗くと中華菓子が数多くある。女子高生に人気のある店なら味も確かだろう。直径16cmくらいの月餅のクォーターピースが25圓、それに揚げパンを買う。

夕方になると帰宅途中の女子高生をターゲットにしてか屋台の揚げパン屋も店を出す。場所を選ばず小腹を満たすことができる台北はファーストフードの先駆者なのだ。



上：龍山寺境内、女性が五体倒地を繰り返し拝礼していた。信仰心が厚いか悩みが深いかは定かにはならず。

左下：圓環、ロータリーを不法占拠したバラックの朽ち果てるなかでも、人の営みは行なわれている、人間の欲望は途切れることはない。

右下：圓環、電話販売代理店でも網際網路(InterNet)の申し込みを受け付けている。



台北蘋果紀行

台湾歌謡

南京西路にある新光三越百貨により、1階の案内係にレコード売り場を尋ねる。エスカレータを地下に降りてすぐ右手と教えられた通りに行く。台湾歌謡に関する知識も情報も全くなく何がなんだか解らないが、適当にCDを物色する。本当は台湾のシリアス・ミュージック系列がどうなのか、知りたかったが良く解らない。結局、阿美族、布農族等の「台湾原住民伝統歌謡」のCD、中国古曲のクラシック版、それにジャケット写真で決めた呉冠英の鋼琴イージーリスニング曲集の計三枚を買った。

その夜、前日行けなかった群々の友達が勤めている店に行ったとき、店の女の子に台湾で今、一番人気のある女性歌手を教えてもらった。「味道」という曲が流行っていて、人気のある歌手は、林憶蓮と辛曉琪で、林憶蓮は香港出身だけど辛曉琪は台湾出身と教えてもらったが、読み方は揮発性メモリーにインプットしたので蒸発してしまった。翌日、もう一度レコード店に寄る時間がなくなり、東京に戻ってからレコード店を調べてみることにした。林憶蓮はすぐに解ったが、辛曉琪は東京では未だ見つからない。林憶蓮は帰りの飛行機でもビデオクリップを上映していた。林憶蓮はディック・リー等とも共演したり曲の提供を受けている、サンディ・ラムだったのだ。ということで今、サンディが切々と唄う「紅顔不老」に嵌っている。鼻に抜ける音節を失った日本人に北京語の唄は新鮮に聴こえる。



政経八百 王順坪 / 著作 漫画家出版社 / 印行

ということで、三泊四日の駆け足による台北蘋果紀行はあっという間に終わってしまった。やっぱり外国はその地に行って街を歩いてみないと解らない。もう少し時間を掛けて街をくまなく歩き回りたかったのが心残りである。しかし、帰ってきてからニューズウィークの台湾特集を読んででも以前より身近な問題と思えるようになったのは一つの収穫である。

1996/5/24 五十嵐進 (ウーシーラン・シン)



上：中華路と淡水河の間、龍山寺に行く途中の若者相手のブティック、左側のNETという店舗はMacWorldや網路生活、新視界等の雑誌を出版している天充文化事業有限公司が経営しているチェーン店、目指すは台湾のベネトンか。

右：蒋介石を祀った中正記念堂、でかい。北京に向かって建っているのは亡命政権の心残りか、国民党の拠り所。

